中大女子 さらに飛躍を

本学OGが就職応援

3月7日、駿河台記念館で第6回ウィング（旧つばさの会）が行われた。この会は、女子学生の就職活動を支援するために、女性白門会の方たちがつくってくださったもので、当日は約200人の女子学生の参加があった。超氷河期といわれて久しいが、女子学生の就職事情をこの会を通して、うかがってみた。

（学生記者・玉井　安子）

例年より厳しい発言

第1部では2つの講演会が行われた。まずは前女性白門会会長、現支部長で、千葉経済大学短期大学部教授の藤本幹子氏と、就職部長・明念一雄氏の対談で、テーマは「何があなたを成功させるか」。

66歳で、なおも現役の藤本氏は、ショッキングピンクのスーツで登場。いきなり「この会場に入ってくるあなたたちを見ていて、（私が面接官だったら）誰も採る気がしなかったわ」という。パンチの利いた発言から始まった。

つまり、「わずか10分ほどの面接で結局モノをいうのは第一印象だ」ということである。中大の学生は成績も良く、会社の評価も高いのだが、第一印象で抜けていくような人がいない。シャツ1枚をとっても、周りと同じでは始まらない。

この第一印象というのは、服装だけではない。立ち居振る舞いも含まれている。それも面接会場だけではなく、受付・廊下・トイレまで、学生は「見られている」。その意識が足りない、と指摘された。

話し方や礼儀は、確かに大事なポイントかもしれないが、それは就職が決まってからも同じだし、そもそも就職活動以前の問題である。

採用・就職アドバイザーの鈴木賞子氏の講演テーマは、「就職活動・7つのキーワード」だった。こちらも「多くの学生に接して思うことは、はっきりいってみんな甘い」という厳しい言葉で始まった。

少ししか会社を見ないで、自分が働きたいところがない、といって、すぐに活動をやめてしまう学生がいる。フリーターでも食べていけるからそれでもいい、という人さえいる。しかし、それで自立できるのか。そういう甘さは企業に見抜かれていて、採用されるのは自立性を持っている人だという。「私ならこうする」という考えが明確になっていない人は、話をすればすぐに見抜かれてしまうのだ。

これは7つのキーワードの1つ目、「働くことの『価値』」に当たる。どんな仕事がしたいのか、どう働きたいのか、正解はないけれど一般論をいっていては駄目だ、ということである。

2つ目は、「活動における『選択』」である。いまの学生は、1つだけを選ぶこと、優先順位をつけることが苦手だという。自分が行きたいのは

A社だが、B社の方が大量採用をしていて有利だ、というのは間違っている。「自分にとってのグッド・カンパニーを探す」のである。そのためには会社を見て、人事を見て、OB、OGを見る。それもたくさん見なければ分からない。

活動中に大切なのは、「自分の強みと、誇れること」をアピールすることである。自己分析の成果を履歴書、エントリーシート、面接に生かすのだ。履歴書やエントリーシートの内容と、面接のそれが、同じようではいけない。提出してから面接までの間に、勉強して成長したことをアピールしなければならない。

エントリーシートに関してはさらに、学生生活のことを問われたら、あくまで大学生活に絞ること。企業が見たいのはどのように大学生活を送ったか、ということである。その中にプレゼンなどを加味して、可能性を感じられる人が採用されるのだ。「したがって、アルバイトで積極性を養いました」などのように無理して結論づける必要はない。

「きっかけ」と「志望動機」は違う

学生の中には、「就職活動の勘違い」をしている人がいるという。例えば、「きっかけ」と「志望動機」は違う。いいサービスを受けて良かったから、というのはきっかけで、自分ならお客さまにこういうサービスをしたい、というのが志望動機である。また、面接で「こんなことをいうと不利になる」という考えも間違っている。いいたいことは何なのか、というのが大事なのだ。

また、履歴書やエントリーシートの内容が良くても、実際に会ってみるとがっかりさせられてしまうというケースは、要するに準備ができることに関してはいいのだが、面接など準備ができないことに対しては底が浅い、ということである。したがって会話が会話にならない。「コミュニケーションとプレゼンテーション」が正しくなされていないのだ。当事者意識を持って深く深く考える必要がある、ということである。「高齢化社会」は頻出語だが、高齢化社会が問題なのではない。それに対する政府の政策などが問題なのだ。

最後のキーワードは、「いま、何が大切か」で、就職するという目的意識のもと、できるだけたくさんの会社を見ようという積極的姿勢で、あすがあるというプラス思考で就職活動に臨むことがあげられていた。

第2部はOB、OGとの懇親会で、あちこちで先輩を囲んでメモを取りながら熱心に話を聞く女子学生の姿が見られた＝**写真**。

昨年度の中大生の内定率は、男子92・4％に対して女子は84・6％、全体で90・5％だが、これは前年比約2％の落ち込みで超氷河期の影響を受けているといえる。女子の就職が厳しいのはどこも同じだが、鈴木氏によれば、内定率の数字はうのみにできないという。その率の分母の質、つまり本当に就職したいという学生たちか、とりあえずいいところがあったら、という考えの学生たちなのかは分からないからである。

「女子は採用しません」と公言された時代に、「とりあえず会ってくれ」と〝道場破り〟をして、企業3社から内定をとったという、鈴木氏ならではの言葉だった。

女性はどこまでいっても女性であって、それはどうしようもない。まだまだ女性差別が横行する企業もあるらしいが、その一方で、女性ならではのきめ細やかなサービスなどを期待しているところもある。男女をどうこういうのではなく、「自分らしさ」を前面に出していけば、きっと道はひらける。

就職活動に正解はない。これから活動に臨む4年生たちには、自分を見失わないで頑張ってもらいたい。私はこれからの大学生活の中で、「自分らしさ」の裏付けとなる何かを見つけようと思う。